

# 教職大学院 Newsletter

# No. 47

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2012.11.17

## 連携協力校の重要性

十文字学園女子大学長 横須賀 薫

教職大学院の制度設計に関わった一人として、その後の展開やそれぞれの院の実際がずっと気になっている。

教職大学院は新しい高等教育機関の一つであるが、18年答申に「力量ある教員の養成のためのモデルを制度的に提示することにより、学部段階をはじめとする教員養成に対してより効果的な教員養成のための取組を促すことが期待される」(p22)と書かれているように、教員の養成・研修の質的向上を図るうえで決め手となるものとされて発足している。そしてその後の設置状況や教育研究の展開を踏まえて、今夏の答申でも「教職大学院は、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成、現職教員を対象としたスクールリーダーの養成の双方において、成果を上げつつあり、なお改革すべき点もあるものの、当初の目標として掲げられた『教職課程改善のモデル』としての役割を果たしつつある」(p16)と評価されている。

それでは教職大学院の新しさ、答申が言うモデル性をどこに求めるのか、人によってさまざまと思うが、私は何と言っても「連携協力校」を設定したことにあると考えている。

これについて18年答申は「(教職大学院は)大学・学部が附属学校を設置している場合、その積極的な活用は当然としつつ、附属学校以外の一般校の中から、連携協力校を設定することを専門職大学院設置基準上、義務付けることが適当である。また、連携協力校以外にも、民間企業、関係行政機関、教育センターなど様々な関係機関と連携することにより、教育内容・方法の改善や指導体制の充実を図ることが望ましい」と述べている。

私は30歳代はじめに教員養成の現場に入り、それから40年以上、大学での教員の養成・研修に携わってきた。一方、学校現場における教育研究、特に授業研究を中心とする活動に加わり、たくさんの学校現場に入ってきた。今でもそれは続いている。

私なりに大学と学校との間を研究においてつなぎ、それを教師の養成と研修の体制づくりと実践とに生かしてきたつもりである。その中で教師が成長したり、停滞したりする現実、その過程をつぶさに実見してきた。そしてそこで得られたものを機会があれば発言し、文章にすること、また政策に反映する努力もしてきた。

そういう中で私なりに得られている一つの結論は、教師が一番成長するのはすぐれた校長が意図的、目的的に学校づくりにあたるその過程をとともにするときだということである。

よく on the job ということが言われ、教師は現場で育つと唱えられるが、その正当性の一方、それはしばしば大学や理論を排除する理由にも使われる。現に今夏の答申が出された際の新聞社説や投書のほとんどがそうであったことは記憶しておいてよいだろう。だから肝心な点は学校現場一般ではなく、「すぐれた校長が意図的、目的的に学校づくりにあたる現場」でなければ教師はほんとうに成長することはできないということである。

教職大学院が発足して5年目に入り、少しずつではあるが、各校の間で個性が芽生え始め、それを基にした発信も行われるようになってきた。たいへん頼もしいことであり、うれしいことである。

私はこれからも各校における連携協力校のあり方に注目していくつもりである。

### 内容

- 連携協力校の重要性 (1)
- 10月の合同カンファレンスに参加して (2)
- 至民中学校研究集会の報告 (6)
- 愛育養護学校を訪問して (7)
- 拠点校だより (8)
- 連携校だより (10)

# October 合同カンファレンスに参加して

10月20日(予備日程10月27日)に後期最初の合同カンファレンスが行われました。「新しい世代を支え学び合う」ことの意味について基調報告を受けたあと、グループに分かれて各自の経験について紹介し合い、長期実践報告・1年目のまとめの構想について語り合いました。

福井大学教職大学院 杉山 晋平

「新しい世代を支え学び合う」というテーマの下、グループ・セッションに先立って、福井大学教育地域科学部附属中学校の奥村栄一郎先生、そして、東京都板橋区立赤塚第二中学校の岡部誠・名地太輔両先生から「新しい世代を支え学び合うことの意味」についてご経験を語っていただきました。

奥村先生からは、教育実習生、長期インターンシップに取り組む教職大学院のストレート院生、そして、新しい世代の講師の方々とかかわりを通じてみてきたことを紹介していただきました。

奥村先生が教育実習生とかかわりで意識されているのは、①実習生にできるだけ多くの仕事を任せ、「習うより、慣れる」ように促すこと、そして、②授業の準備・練習、実際の授業実践、それ以外の生徒指導や環境整備も含めて「できるだけ多くの時間を実習生と共有する」ことです。

その中で、特に大切にされていることは、「実践を省察する時間の共有」です。実際の生徒たちへのかかわりからどのような気づきが得られたか。授業を通じて生徒がどのように変わり、何ができるようになっていったのか。実習生同士が互いの気づきを交流し、次になにかかかわっていけばよいのかを話し合う場に奥村先生ご自身も参加され、実習期間を通じた実習生の変化を確かに感じられてきたそうです。同時に、実はそれが奥村先生にとっても生徒の姿をつかみ直す貴重な機会ともなり、実習生を支える自分自身の変化もまたお感じになっているということでした。

また、教職大学院のストレート院生や新しい世代の講師とかかわりから、「世代継承」という視点の大切さもお話いただきました。何よりもまず、世代を問わず、同じ目標に向かう仲間として一致団結して仕事に取り組んでいく。そのような同僚性を基盤として、附属中学校では、経験を積んだ世代と新しい世代とのコミュニケーションの充実に取り組んでいます。

奥村先生は、校務分掌等とともにする新しい世代の同僚を支えながら、そこでのさりげないコミュニケーションも大切にされてきました。一緒に生徒の下校指導にまわろうと若手の先生に声をかけ、一緒にまわりながら、自分が先輩から教えられたこと、引き継いできた思いを伝えていく。そのような日常の瞬間を大切にしながら、附属中学校の校内研究は年齢・経験年数・教科を横断する小グループの部会体制をとっており、学校全体として世代継承のサイクルが組織化されています。そのサイクルは、教師が互いの授業を参観しあうことで子どもたちの具体的な学びの姿を語り合っていくことでより確かなものへと発展してきたことをご紹介いただきました。

「環境が人を育てる」—奥村先生からは、生徒にとっても、教師にとっても、互いに成長しあえる環境を探りあて、それをいかに持続していくことができるかが大切だというメッセージをいただきました。

続いて、岡部先生、名地先生から赤塚第二中学校の取り組みを通じてみてきたことをご紹介いただきました。現在、同校は教科センター方式を取り入れた校舎改築が進めながら、新しい教育実践とそれを支える校内研究のさらなる充実に取り組んでいます。先の附属中学校のお話にもあった「互いの授業を見あうこと」から出発した同校の取り組みは、性別・教科・経験年数をこえて教員が互いに学びあうコミュニティづくりを目指して現在も進められています。そのようなアクションは、決して1人で実現可能なものではありません。岡部先生・名地先生は互いを心のよりどころとしながら、他のコア・メンバーの先生たちとともに学校改革に取り組んでこられました。

岡部先生からは、経験豊富な世代の先生をつなぐ取り組みについてお話いただきました。具体的には、ベテラン世代の先生たちの授業を参観し、「生徒たちがどのように学んでいて、先生のどのような発言が光っていて、自分の授業でもこんな挑戦をしてみたいと考えた」といった参観記録をつくり、授業者と参観者で共有していくという取り組みを重ねられてきました。授業者の先生からは大変喜ばれ、教員同士のコミュニケーションの活性化へとつながっていきました。このように授業参観を通じて個々の教員同士のつながりを深めながら、それと並行して、主幹教諭を中心としたチームで校内研究体制の検討が進められているところです。

岡部先生は、「互いの授業を見あうこと」について、授業の改善点ばかりを探して「教師として何が欠けているのか」をぶつけあうことではなく、教員が互いの力を最大化して発揮しながら、その力を高めあっていけるコミュニティづくりにつなげていくことを大切にされてきました。このような視点は、教職大学院の合同カンファレンスへの参加を重ねていく中で得られたもので、毎月のコラボレーションホールでの学びを同校の校内研修会へと連続させるべく、年齢・性別・キャリア・教科の違いをこえた小グループでの話し合いに基づいた校内研究に取り組まれているということでした。学校内には、校務分掌・職員室・学年・教科・世代など、フォーマル・インフォーマルにさまざまな実践コミュニティが存在しています。今後は、人と人だけでなく、多様な実践コミュニティ間のつながりも射程として校内研究体制の整備を進めていきたいと思いますとお話いただきました。

名地先生からは、新しい世代の取り組みについてお話いただきました。新しいアクションの出発にあたっては、多少なりとも戸惑いはつきものです。日常を落ち着かせるのに精一杯な状況であれば、新しいことに手を出すことに怖さをとまなうこともありえます。そこで、岡部先生から研究主任を引き継いだ名地先生は、「(主任が一人で突っ走るのではなく) みんなでかかわりあって新しいアクションをつくっていく」ということを目指されてきました。

その方向性は、新しいアクションを支える「特別研究部隊」の取り組みに具体化されていきました。同部隊は、名地先生の呼びかけに応じて志願・集結した7名の先生を中心とする緩やかなコミュニティで、校内研修のアイデアが出しあい、それをもとに柱を立てて、校内全体に浸透させていく起点として機能しています。

こちらの取り組みにおいても一貫して鍵とされているのが、「互いの授業を見あうこと」、そして、その参観記録を共有していくことです。自分たちの実践を客観的に見つめ直し、次につなげていくための記録とはどのようなものなのか。同部隊を中心にその記録の作成が進められながら、議論の輪は徐々に校内に広がりを見せました。

ところで、名地先生は、同部隊の取り組みから当初は想定していなかった「副産物」が得られたことに気づかれたそうです。それは、「結束力」です。この気づきは、「教員同士のかかわりあい、そして、教員と生徒のかかわりあい」が赤塚第二中学校の最大の武器で

あり、原動力である」という名地先生の認識をより確かなものへと導きました。

同部隊の中で高まっていく「かかわりあい」が、校内全体の「かかわりあい」の醸成へと連関していく。特に若い世代が中心である部隊の「一生懸命」な姿は周囲の心を打ち、職場の「かかわりあい」を活気づけるのに一役かっているということでした。名地先生は、至民中学校の鈴木三千弥先生の「すごく辛い状況でも、笑ってそれをのりこえられるメンバーがいれば何とかなる。そこに前向きに取り組んでいく姿勢があれば、何とかなる。」という言葉を引き合いに出され、「かかわりあいを通じて何でも解決していく」という赤塚第二中学校の教師文化が特別研究部隊を通じて継承されていく可能性を感じられているそうです。

岡部先生・名地先生がそれぞれ異なる世代のコーディネートに取り組みながら、互いに支え合ってその結節点をつくりだし、校内研究の整備を進められてきたことが伝わってくるお話でした。岡部先生は、「かかわりあい」というものは1つの学校内で完結するものではなく、教職大学院のカンファレンス、ラウンドテーブル、そして、これまでの修了生が残してくれた長期実践研究報告書を通じて、社会的にも時間的にも広がるコミュニケーションであると指摘されました。「今年度もそのような持続的なコミュニケーションを支える長期実践研究報告書をつくりあげていきましょう」—岡部先生からの力強い言葉を受け、続くグループ・セッションも活気のある時間となりました。

## スクールリーダー養成コース2年／丸岡南中学校 遠藤 正宏

10月20日に合同カンファレンスに参加しました。今回のテーマは「新しい世代を支え学び合う」ということでした。

最初はオリエンテーションで附属中学校の奥村先生と、赤塚第二中学校の岡部先生と名地先生の発表を聞



かせていただきました。奥村先生の話で印象に残ったのは、教育実習生との関わりで、実習生が現場での経験を得ることで変わっていくとともに、自分自身も参観者として生徒を見ることで新たな面を見つけるなどの発見があるということでした。先生は「ギブアンドテイク」という言葉を使われていましたが、なるほどなと思いました。赤塚第二中学校のお二人の先生は、学校の組織をコーディネートしていくことについてのお話をさせていただきました。それぞれの学校の中の立場で、人を活かしていくための組織作りについて実践されていることが話されていました。どちらの方も楽しそうに実践を語る姿を見て、エネルギーが

ちだなあと感じました。そうやって学校の中でエネルギーを周囲に放っている姿が想像できました。先生のお話の中に、教員と生徒との関わりについてのことがありました。丸岡南中学校の根本にも「生徒一人一人を全教員で見る」という点があり、大変共感が持てました。

グループに分かれてのセッションでは、前半はそれぞれの現場での新しい世代との関わりと、新しい世代としての関わりについて意見交換を行いました。

新しい世代との関わりとして、どう若い世代の先生たちを巻き込んでいくか、若い世代だけでなく学校全体をどう巻き込んでいくかという組織についての話が出てきていましたが、その根本にあるのは意見交換しやすい環境作りや、コミュニケーションが大切であるなあと感じました。いろんな先生方が、飲み会でのコミュニケーションを大切にされていると聞き、そこにも共感が持てました。

後半は、長期実践報告書の構想について語り合いました。今まで長期休業中にまとめてはきていますが、「いよいよ来たか」というのが率直な感想でした。グループの中の先生方はそれぞれ構想が固まっていたようですが、自分自身はまだまだ不確定な要素が多く、少し不安を感じました。まあ今後の冬期休業が勝負になってくるかと思いますが、お互い頑張りましょうという感じでした。今後は長期実践報告書の作成を視野に入れながら、校務にいそしんでいきたいと思いました。



## 教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校 中村 諒

本日のテーマ“新しい世代を支え学び合う”ことを考える上で、“支える”ことには片方が片方をケアするだけでなく、共に育み共に学び共に理解し共に励んでいくといった協働する姿勢の必要性を感じた。協働しようとする姿勢を養うには他者を思いやろうと感じるきっかけが必要であると考えている。例えば、その人の行動や思いの“何か”を好きになり、「この人なら協力したい」という思いを持つことが必要であると感じる。その思いを育むまでには、様々な場面でその人を理解する場面が必要であり、関わりをもつことが絶対的に必要ともなってくる。これだけを見ても、“新しい世代を支え学び合う”までには多大なその人との関係作りが必要であり、どのような関わりをもって来たかによって、支え合うコミュニティとなるか、ただの組織になるかが問われると感じた。

名地先生や岡部先生方がおっしゃったように教員同士が連携することには、教員同士が関わりあいながら、関係づくりを行い、一人一人がそのコミュニティとしての主体性を持つことが大切であると述べていた。赤塚第二中学校の教師を支える部隊“特別研究部



隊”では、部隊であるからにして、トップダウンのような形式も考えられるが、そうではなく、主体性を持ち、様々な教員組織を支え合うコミュニティを形成することによって、部隊をきっかけに他のグループ同士を引き付けあい支え合うコミュニティになると感じ

た。学校においてもそのような関係をもった部隊を作るにも、やはり関わり合いが必要であり、これは教師と子どもの関係づくりの過程において得た信頼や頼る・頼られるといった関係性にも通じることであり、お互いを支え合おうと感じるような関係づくりを求めることが学校現場で必要ではないかと感じた。

私は新しい世代で“支えられている立場”であるということカンファレンスの中で述べていたが、名地先生は「中村先生が支えられているといった環境の中でも、自分に一つ自信を持っている力があると思います。その力が周りの先生を支えることになり、何かしらの形で支えていると感じるから支えられるのです。」と述べてくださったことが大変印象的であった。私は生徒との関係づくりに自信を持っていた面があるが、その中でもたくさんの生徒との関係性や働きかけで毎日悩んでいる。インターンという立場でも「今日はこれでよかった」と感じる日は一日もなかった。また本校では「しんどい」と生徒から声が聞こえてくるような状態が続いている中で、メンターの先生やクラス担任の先生や他の先生方と普段から、廊下でミニ会議をする場面が多く、院生でありながらも協働するコミュニティの一員として扱ってくれることのありがたみを日々感じている。また日々の省察記録をとり、自分を省察しなおした上で、メンターの先生から毎日いただくコメントも自分の中で完結していた考えをとらえ直していただく機会にもつながり、より大きな学びと自分の学校での存在を考え直す大変ありがたい機会となっている。

まだまだ大変な状況が続くと想定するが、生徒の声を一つ一つ拾い、授業の場でも普段の生活の中でも地道に関係作りを図り、生徒を支える一員として努め、逆に生徒自らが主体性を持って、学校を支えようと感じられるような支え合うコミュニティを形成していきたいと感じる。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属小学校 佐々木 梨衣

10月の合同カンファレンスのテーマは、「新しい世代を支え学び合う」であった。「新しい世代」とはどのような人たちのことなのだろうか。私は、オリエンテーションを聞きながら考えていた。一番に浮かんだのは、私自身である。

私は、昨年の4月から附属小学校でインターンシップをしているが、当初は教師がどういうことをするのか、放課後の先生方は一体何をしているのか、学校はどのようにして動いているのか、何も分からない状態であった。私は、その何も分からない状態であることが恥ずかしく、何とかして自分で仕事を見つけなければ…と必死であったように思う。カンファレンスの中で、「自分自身が若かった頃、教えてもらうことに抵抗はなかった。」という他の先生の言葉を聞いて、今では私自身も同じような気持ちでいることに気付いた。当初は、分からないことを聞くこともできなかったのである。どうして、このように変わることができ

たのだろうか。一人では解決できなかったことを、他の先生方の助けを借りて解決できた経験が私を大きく変えたのではないだろうか。困っていると声をかけて下さったり、私の悩みを自分のことのように最後まで話を聞いて下さったり、私は様々な場面で多くの人に支えられていたのである。

私は、この多くの人に支えられた経験が、私自身を支えていると思う。支えてくれる人たちがいるからこそ、私もしっかりと進んでいくことができるのである。そうして進んで行って、次は私自身が支える側になるのかもしれない。支えられた経験に支えられ、次の新しい世代を支えていく。そんなやりとりがずっと続いていくことで「支え合い」が生まれていくのではないだろうか。そうして、学校も社会も成り立っているように感じた。この「支え合い」の輪の中で、人は育っていく。私は今、身をもってその経験をしている真っ最中なのである。

## スクールリーダー養成コース1年／福井市安居中学校 加藤 学

10月20日に行われた合同カンファレンスは、夏期集中講座以来の約2ヶ月ぶりの集まりとなった。どの学校でも9月、10月には大きな行事や活動を抱えていることが多い。私たち院生は、夏期集中講座で学んだ理論や実践を学校に持ち帰り、それらを基にそれぞれの学校で新たな実践を行うこととなる。そのため、今回の合同カンファレンスは、自分たちの学校での新たな実践、そして、それらの実践を通して得られた「新たな学び」を持参しての集まりに自ずとなっていたように思う。コラボレーションホールに集まったどの先生方の顔にも、この2ヶ月の出来事を「話したくて、話したくて、しょうがない」といった表情が現れていたように感じられた。

オリエンテーションでは、「新しい世代を支え学び合うことの意味」をテーマに、まず、奥村栄司郎先生から附属中学校における教師の協働についてお話をお聞きした。「授業公開を多く行っていく中で『子どもたちの学び』を通し、教師間の世代を超えたつながりが構築されていく」という事例が印象的で、教師集団のあるべき姿について考えさせられることとなった。次に、岡部誠先生、名地太輔先生から赤塚第二中学校における転任教員、新任教員への支援についてお話をお聞きした。岡部先生のお話では、授業の参観記録の作成が授業改善だけでなく若手とベテランをつなぐ役割となっている事例、名地先生のお話では、若い先生を中心としたインフォーマルな組織が、公式な研究グループの話し合いを支える存在になったり、互いにつながることによって安心感、所属感、仕事に向き合う活力を与えたりする役割をはたすようになったという事例を紹介していただいた。どちらのお話からも、コミュニティとしての成長が世代を超えた教師の力量形成に重要であることを学ぶことができた。

グループ・セッションでは、相談室登校の生徒の関わりや支援員の先生の子どもの接し方から、子どもたちの家庭環境や卒業後の姿を見とることの大切さを学んだというお話を聞き、私自身の経験と重ね考えることとなった。子どもたちが学校で見せる姿が全てでは無く、学校内外の多くの目多面的に子どもたち見ていくことが必要であると改めて考えさせられた。ま

た、そういった経験が、教師としての力量を育ててくれることにつながると感じた。学校のつくりや学校内での子どもたちの居場所についても話しが広がった。子どもたちの活動に常に目が行き届く環境、生徒がそのときの気持ちや気分によって様々な居場所がもてるような学校づくり、教師の協働による指導体制の充実といったことが、不登校や相談室登校を未然に防ぐ結果につながっていくといった意見を交換することができた。次に、これからの学校を担っていく若い世代の教師について話題を変え話し合った。その中で、授業、生徒指導などさまざまな場面で「自ら実践を行いながら教師が経験を積み重ねていく」といった研究体制を各学校で構築していくことが喫緊の課題であると感じた。学校現場では、日々さまざまな問題や課題がうまれてくる。その問題や課題を「危機」と捉えるのか、子どもたちと共に成長する「チャンス」と捉えるのか。「実践の中で子どもたちと共に学び、成長し続けていく教師像を多くの現場で共有していくことが大切である」と考えさせられた。

教職大学院で学ぶようになり半年が経過し、回を重ねるほどに、毎月の合同カンファレンスを楽しみに待っている自分がいることに気づかされる。合同カンファレンスでは、多くの先生方と学校での課題や悩みを共有し、それぞれの学校での実践や取り組みに耳を傾けながら、自身の実践を捉えなおすことができる。この時間は、新しい自分と出会い、仲間と共に学ぶことの楽しさを再発見する素晴らしい機会を私に与えてくれている。この経験を大学院の中だけに止めずにしっかりと学校に持ち帰り、学ぶことの楽しさ、素晴らしさを、学校で子どもたちと共有していけるようにしていきたいと考えている。



## 教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 北村 元輝

10月27日の合同カンファレンス予備日程にて“新しい世代を支え学び合うことの意味”というテーマで立待小学校岩堀教諭のお話を聞くことができた。まだインターンという立場である私にとっては若い世代として何を大事すべきなのかを考えながらお話しをお聞きした。また岩堀教諭の教員生活におけるさまざまな経験をお聞きする中で、「教師が人を育てること」ということについて考えることができた。お話しの中ではじめには「教師といってもまずは育てるより育てられる。それが周りの先生方であり子どもたちである」とあり、私の現状と重なり、インターンという立場ではあるが教師としての第一歩目をしっかりと踏み出していることを再認識することが出来た。

そしてお話しの中で特に「子どもたちにいろいろと気付かされる。そして教師をやらされているのではなく、やらせてもらっている。」という言葉が印象深く残っている。この言葉とは違うかもしれないが、私の中では普段から意識している「授業は子どもに教えるのではなく、子どもと考え作っていく」ということに非常につながった。自分も現在のインターンシップでは、学生でありながら子どもたちの前では“教師”をやらせていただいている。目の前にいる子どもたち・先生方に感謝する毎日である。そうした日々と岩堀教諭のお話をつなげて、若い世代として何を学んでいきたいか、大切にしていきたいかをゆっくりと考えていきたい。貴重なお話をありがとうございました。



## 教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校 木子 泰宏

10月の合同カンファレンスにて、小島院生の話があった。その中で一番印象に残ったのが、「去年私が悩んでいた時に、周りの人が助けてくれた。アドバイスをしてくれた人、気軽に声をかけてくれた人、と様々だった。その中でも一番心地が良かったのが、共に悩んでくれた人だった。」という話だった。私も他ならぬ小島院生に相談に乗ってもらったことがあった。

私も教職大学院に入ってから悩んだことがあった。一人で考えても答えが出せず、少し参ってしまっていた。そんな私を見兼ねた小島院生が相談に乗ってくれた。小島院生は私の話を聞き、共に悩んでくれた。悩みを自分のものとして考えてくれて、去年の自分の経験を話してくれたり、自分がどうしたりしたかを話してくれた。話を聞いて共に悩んでくれる存在は非常に心強かった。

この話を聞いて、なるほどあの時のようなことか、と納得できた。というのも私が悩んだ時も周りからアドバイスをもらい、なるほどそうしてみようとは思っていたのだが、どうしても気持ちは沈んだままだった。しかし、小島院生と話していくうちに気持ちが前向きになっていったのを覚えている。私が前向きになれたのも、小島院生が共に悩んでくれたからだったのだろう。小島院生が誰かにそうされたように、私も小島院生にそうしてもらった。今度は私の番である。一緒に悩んでもらって嬉しかったことを忘れずに、来年、後輩が悩んでいた時は、小島院生のように共に悩んでくれる良き先輩になりたいと強く思った。

## 福井市至民中学校公開研究集会の報告

### 公開研究会は生徒のために

スクールリーダー養成コース1年 高間 恵美

至民中学校は、私の母校である。病休代として3ヶ月勤務したこともある。移転開校記念誌には、ささやかな思い出のメッセージを寄稿させていただいた。毎年公開研究会に行きたいと思いつつも、校種が違うこともあってなかなか行けず、教職大学院生になった今年、念願かなってやっと参加することができた。母校ではあるが、その新しく活気にあふれた校舎には驚かされるばかりだった。丁寧に案内してくれる生徒を見ると、もしかして同級生のお子さんかもしれないと、教員の目というよりはふるさとに帰った卒業生の目であちこちを見ていた。

研究資料を開いて、私はさらに驚いた。「第0章 お詫びと現状」という見出しで始まり、「至民中生暴れ警察出動」の新聞記事が大きく載っていた。至民中の先生方は、逃げも隠れもごまかしもしなかった。現状をまっすぐに見据え、ありのままを公開し、再スタートへの手がかりとしてこの公開研究会を開催されていた。私はこれまでに数多くの公開研究会に参加してきたが、こんなにも先生と生徒の熱い思いが伝わる研究会は初めてだった。

公開授業は国語に参加させていただいた。入り口で「授業の見方・分科会の進め方」という紙と「1班の生徒を中心に見取ってください。分科会でも1班のグループにご参加ください。」というメモを受け取った。至民スタイルとして定着している研究会の方法だとは思いますが、私には初めてのスタイルだった。今年、堀川小学校の研究会にも参加したが、分科会は従来通りのスタイルだった。参加者は意見を活発に話されていて、多くの考えを聞いたのだが、時間の制約と遠慮もあって、自分の思いを伝えることができなかった。しかし、至民中の小グループによる分科会では、顔をつきあわせながらざっくばらんに話し合うことができ、楽しい時間があったという間に過ぎた。

分科会が充実した理由は、小グループというスタイルではない。やはり授業の内容である。新しい教室、70分

という時間を生かそうとする授業者の前向きな思いが伝わる授業だった。もちろん、いくつかの課題も見える授業でもあった。だからこそ、分科会では参観者の多くの意見が生まれ、実りある分科会となったと感じた。



その後全体会に参加した。壁にある校訓「自主 誠実 根性」になつかしさを感じたのもつかの間、生徒代表挨拶に始まり、研究経過報告でステージの上に5人の生徒が上って発言する姿、会場の後ろに多くの生徒が座って参加している姿に次々と驚かされた。これが「生徒が参加する研究会」なんだと実感した。自信に満ちた生徒の姿を見ると、問題が起きた今の至民だからこそ、全体会を始めさまざまな場面に生徒を参加させる研究会が大きな意義をもつと思った。間違いなく生徒のために「やってよかった」公開研究会だった。

そして、この公開研究会は私たち中藤小学校の教員に勇気を与えてくれた研究会だった。あと5ヶ月で、中藤小は新築移転する。公開研究会を開催することは、我々教員の勉強になるだけでなく、多くの方に参観していただくことが子どもたちのためになると信じて、これからも研究を進めていきたい。

## 愛育養護学校を訪問して

教職専門性開発コース1年 堀江 春那

11月2日、東京の愛育養護学校の訪問、体験をさせていただきました。6月のラウンドテーブルや先輩方の話から、愛育養護学校が子どもの思いにとことん寄り添う方針であること、子どもの帰宅後に子どもの遊びの軌跡をたどりながら全員で掃除をし、子どもの姿や行動の意味などを語り合うミーティングを行っていることなどを聞いていた。私は特にミーティングに関心があり、どのような体験をし、話ができるか楽しみにしていた。

当日、私は幼稚部・1,2年生のクラスに入った。4人在籍していたが、この日はたける君としん君とそうた君の3人だけだった。私はたける君と1日一緒に活動させてもらうことにした。たける君は少しおとなしい雰囲気の子だったが、すぐに私を受け入れて電車のおもちゃや遊びの紹介をしてくれた。教室には笑顔で子どもの行動を見守る暖かい雰囲気が流れていた。

たける君との活動でとても印象的な場面があった。水道の近くでコップで水遊びをしていたたける君だが、急に思い立ったようにコップを持って少し離れたホワイトボードまで行き、水をかけてしまった。たける君は「(書いてある文字が)消える!」と嬉しくなったようで、何度も水を汲んでホワイトボードにかけていく。当然、下は水たまりができていく。私は「止めなくていいのか」と迷っていた。一緒にかかわっていた方は止めることなく、「消えるね」「水いっぱいだね」「布でふいてみたらもっと消えるかな?」とあくまで共感的な姿勢

だった。この場面で「子どもの思いにとことん寄り添う」という方針を実践されていることを強く感じた。

子どもの帰宅後、クラスでのミーティングに私も参加させていただいた。そこで、たける君がホワイトボードに水をかけていたことも伝えた。すると、ホワイトボードに書いてあった文字はしん君が以前大切に書いていたものであること、ここ数日たける君としん君の間でトラブルがあったこと、たける君は自信のなさからやり返すことができなかったことなどを教えていただいた。そして、それらの出来事に起因するたける君のやり場のない思いがその行動につながったのではないかと話していった。私は、ミーティングがなければその事実は知らなかったし、一つの遊び、突発的な行動としか捉えていなかったと思う。子どもの姿を共有し合うことで、ひとりでは見えなかった子どもの思いを知ることができた。普段のインターンの中で、なんとなく過ごしてしまう時間、やり過ごしてしまう子どもの姿がある。また、記録には書くものの共有はできず、「なんでだったんだろう」と疑問のまま流してしまうこともある。そうではなく、気がかりなことを周り話し合い、子どもが今どんな思いを抱えているかを考えていかなければいけないと改めて感じた。愛育養護学校でのたくさんの学びを、今後かわる子どもたちや先生方との中で生かしていきたいと思う。

教職専門性開発コース1年 堀江 沙也香

小さく、可愛い門を抜けると、ツリーハウスがひときわ目立つ前庭がありました。そこが児童玄関になっており、子どもたちがひょこっと顔を出してこちらを見ていました。その中から、「今日、愛育にいるの!?!」「歳いくつ!?!」と質問してきたのがマキちゃんでした。少し乱暴な言葉づかい、はじめは男の子と見間違えるほどでした。「今日、お姉さんと買い物するから!ここ座って!」と、指名され、マキちゃんと愛育養護学校で1日を過ごすことになりました。

午前中は、マキちゃんのお昼ご飯をみんなで一緒に買いに出かけました。たくさんのコンビニや100円ショップに行っても、マキちゃんの買いたいものはなかなか見つかりませんでした。マキちゃんは食べ物コーナーを見ると「つまらない。」「これ、おいしくないよ。」と私に言いました。私が「じゃあ、これはどう?」と聞くと、「もういい。次行こう。」と次々とお店を見て歩きました。私は、マキちゃんが何を求めているのだろうと不思議でした。マキちゃんは、午前中の活動時間の全てを費やして、やっとお昼ご飯を買いましたが、嬉しそうではありませんでした。夕方の振り返りで、マキちゃんは毎日500円の予算の中でお昼ご飯を買っていることを知りました。予算内で買い物を続けていると、買うことができるものが限定されてくるので、食べたい商品がどんどん無くなっていくのでしょうか。私は、彼女がどこかつまらなそうな表情でいたのはそのせいなのだと気づきました。担任の山田先生は、コンビニ巡りがこれ以上彼女の気持ちを満たすことはできないだろうと考えていま

した。そして、登校後、マキちゃんと“お弁当作り”と一緒にやってみようということになりました。そのきっかけづくりとして、山田先生はマキちゃんにお弁当を作って、人が作ったお弁当を食べる喜びを感じてほしいと笑顔で語ってくれました。その時に先生が「あの子は本当に健気な子だから」と言った言葉が、私の中でマキちゃんを表す言葉としてピタっとはまった気がしました。マキちゃんの言葉は少し乱暴に聞こえますが、その中に含まれる彼女の姿は、人の気を遣うことができる健気な女の子でした。マキちゃんは、外ズックを忘れた私に対して、「靴無いの?山田!靴貸してあげて。」と教えてくれたり、11月の肌寒い街中でみんなのパーカーを借りて嬉しそうにしながらも、「寒い?」と声をかけてくれたりしました。

愛育養護学校で1日を過ごし、子どものありのままの姿を受け入れ、子どもの思いを尊重する姿勢を学ぶことができたと思います。先生方は、子どもたちの“やりたい”という気持ちから始まった活動をとても大切にされていました。子どもは自分の思いが満たされることで、次々と新しい状況、活動に参加することができると感じました。先生方は子どもたちを温かく見守り、丁寧なかかわりの中で、一緒に楽しんでいました。そのような姿を見て、私は日々の実践を振り返らずにいられませんでした。改めて、目の前にいる「子ども」を尊重すること、楽しいと思えるかかわりの中で作られる関係性を大事にしながら学び続けていきたいと思いました。

注) 愛育養護学校に在籍する子どもさんの名前はすべて仮名です。

11月初旬、大きな病院に囲まれたその中心にこじんまりとある愛育養護学校を訪問させていただいた。校内にはクラスごとに教室はあるものの、ほかのクラスの子が出たり、入ったりして、教室の壁を感じさせない雰囲気だった。そんな愛育養護の先生方の子どもたちとのかかわりは、『卒業までにこれをできるようにしよう!』とか『これをできるように指導しよう。』という目標のようなものは感じられなかった。そこにあるのは、『こうなりたい。』と思っているであろう、『子どもの願い』であった。

愛育養護の先生方のかかわりを見ていると常に子どもの思いを丁寧に拾い、丁寧に反していた。また、活動を強要するのではなく、子どものペースで子どもの『やりたい。』思いを優先するかかわりをされていた。その様子を見て私も『このような教育を目指したい。』と思う反面『本当にそれでいいのか?』と疑問に思う部分もあった。そのことを活動後のクラスミーティングで質問したところ、私の入ったクラスの高橋先生は「日々迷い、葛藤しながらかかわっているし、時間の制約があって切ってしまうときもある。」とおっしゃっていた一方で「将来のことを考えすぎないで、目の前の子どもの行動を満足するまでやることで、その子のペースで何かしらつかんでいくと思っている。」とおっしゃっていた。その言葉を受けて、私が日々『これをできるようになっ

てほしい。』『これはやっちゃだめだ!』という言葉は、子どもが自分で成長する可能性を狭めてしまっているのではないかとまた、そういった言葉をかけることを学校の『制約』のせいにして、私自身が丁寧にしかかわることを怠っていたのではないかと私自身のインターンでのかかわりを振り返るきっかけとなった。

4月からインターンに行かせていただき、8か月が経とうとしている。日々の子どもとのかかわりに少し余裕のなくなっていたこの時期に、愛育養護に行くことができて本当に良かったと思う。愛育養護のたいちくん(仮名)とのかかわりを通して、「寄り添うこと」「共有すること」という子どもとのかかわりの基本をとらえなおすことができ、愛育養護の先生方とお話から「子どもの思いを受け止める」ということを基本に「教師の素直な思いを伝える」「一緒に悩む」という本当に一人の人間として「子どもと向き合う」ことの大切さを感じることができた。たった一日の活動で感じることは、愛育養護の教育のほんの一部だったのかもしれないが、私がこれからも子どもとのかかわっていくための柱を立てることができたように感じている。まだまだ未熟だからこそ、毎日迷ったり、悩んだりすることもあると思う。だからこそ、そのことをしっかり受け止めて、子どもと一緒に学びながら、私の中にたった柱をどんどんたくしていこうと思う。

## 福井県立 嶺南東養護学校 伊藤 ゆかり

## 拠点校だより

### 「インクルーシブ教育の実現のために、本校交流チームの取り組みと今後」

近年特殊教育から特別支援教育(学教法)に代わり、「インクルーシブ」という言葉が聞かれるようになるなど、特別な支援の必要な子供の周りに変化が起きた。中教審は「共生社会とは、障害者等が積極的に参加できる…全員参加型の社会である。…我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。」と述べている。

特別支援教育の目指すところが「一人一人の個への支援教育、共に学ぶ」であるなら、今までの学校の枠は曖昧となり、柔軟な選択肢が用意されねばならない。今

後学校は、「①連携強化②生活基盤の形成③社会の構成員としての基礎づくり」をキーワードに、既成の概念にとらわれない取り組みが、必要となりそうである。

インクルーシブの考えが浸透し始め「個別の配慮」は徐々に進んでいるようであるが、学校間や機関同士の連携については充実しているとは言い難い。約10年前、自閉症の子どもが地域で生きることを描いた漫画本「光とともに…」の中で、全員参加社会でなかったことを示すかのような言動に触れた。(以下の絵参照)



「光とともに…」  
戸部恵子  
秋田書店

\*インクルーシブ(inclusive)とは、「含んだ、いっさいを入れた、包括的な」『Eグイト英和辞典』という意味。

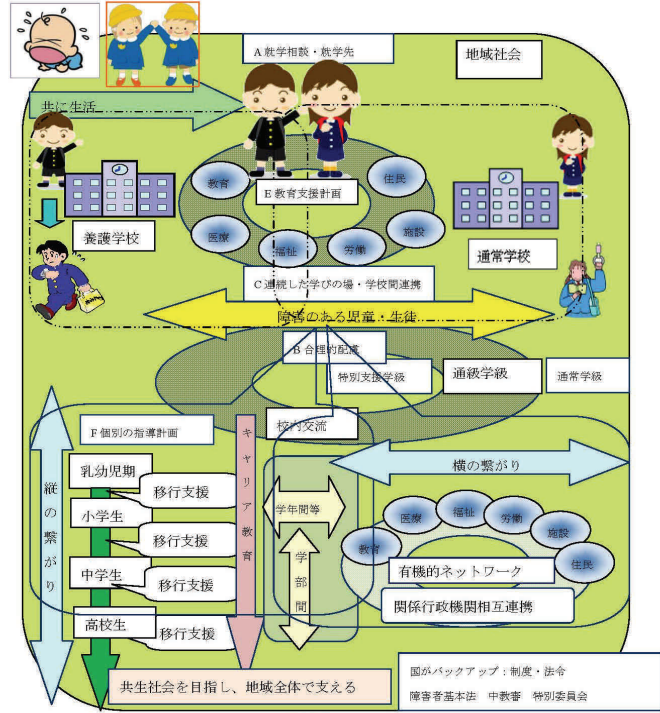


が、これからは、国・地域の全員が共生社会を目指すのである。

そこで、本校でも昨年からは、庶務部の中に交流チームを作り、本格的に取り組み始めた。

本校交流チームの独自の取り組みとして、H23年度には、居住地校交流において障害種の違う3本の連携・協働の実践（交流チーム・双方の担任・担当の連携）とその事前指導のための障害理解プレゼンテーション作成、そしてMK中学校との合同授業を行った。H24年度は、夏休みに居住地校交流ワークショップを開催した。さらに大学との研修も数回行い、徐々にではあるが本校内でも「交流及び共同学習」について、職員意識が変化してきており、今後が楽しみである。

今後、以下の図のように変化していくことを見越して、今まで以上にA・C・Dが養護学校に求められると予想される。共生社会において学校が協働・連携の要になれるよう、地域から何を求められ、本校から何を発信すべきかわかり見極め、本校においても組織的に計画的に取り組みればと考えている。



＊「A・C・D」→「A（就学相談・就学先）・C（連続した学びの場・学校間連携）・D（交流および共同学習）」

D 交流及び共同学習	障害の有無にかかわらず、共生社会の形成に向けて経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育て組織的に計画的に継続して
	双方の学校で教育課程に位置付け、年間計画作成など計画的・組織的に推進が必要である。
	校内交流においてもねらいを明確に、教育課程の位置付け、年間計画作成など計画的・組織的に推進が必要である。
	教育委員会等との連携が重要である。
	場を共に…2つの側面：触れ合う交流の面、教科等学習する共同学習の面
	交流形態：直接交流・間接交流
	交流対象：個人同士・個人と集団・集団同士（学年・学校間・居住地校・地域住民・高齢者等）教師間で・保護者と・地域住民と・行政機関等と

福井大学教育地域科学部

附属特別支援学校 柳澤 秀樹



現在の福井大学教育地域科学部附属特別支援学校の前身は、1964年（昭和39年）4月に附属小学校に設置された特殊学級と1966年（昭和41年）4月に附属中学校に設置された特殊学級です。1971年（昭和46年）4月に、福井県内初の知的障害の養護学校として、福井市八ツ島に新設されました。当時は、田園風景に囲まれた自然豊かな所でしたが、現在では、周辺に学校や住宅も多くなってきました。また、2007年（平成19年）には、特殊教育から特別支援教育への転換という大きな流れの中で、現在の附属特別支援学校に校名を変更しました。本校のシンボルと言えば、初代副校長の木水育男先生と親交の深かった世界的芸術家の嘔吐（あいおう）が、1975年（昭和50年）3月に作った壁画「平和の楽園」です。本校の教育理念を表しており、壁画を見るたびに、気持ち引き締まります。

創立以来本校は、知的障害を持つ児童・生徒のためにどのような教育を行ったらよいのか、どのような学校のあり方が理想なのかを常に追求し、教育活動を行ってきました。その実践・教育活動においては、継続性を大切に、考え方や実践のどこを肯定し、どこを修正したらよいのかという見直しを繰り返してきました。現在の本校の

践の礎となるものは、1985年（昭和60年）の第4回の教育研究集会において確立されました。それ以前の1978年（昭和53年）より「教科群」という考え方を取り入れ、教科群を「健康科目」「基礎科目」「労働科目」に分け、教育課程の「各教科、道徳、特別活動、養護・訓練」という枠組みを外し組み直しました。そして、1985年（昭和60年）に、指導形態、方法、体制などの具体的展開は、各学部が、個の実態や集団の実態に応じて独自に工夫していくとした総合的教育を明確に示しました。これが、「生活教育」であり、生活の営みを教育活動の対象とし、学校の中で擬似的な生活を行う中で、実際の生活に活かすことのできる力を養っていくという「生活教育」のスタイルは、現在も受け継がれています。

本校には、3つの学部（小学部、中学部、高等部）があり12カ年一貫教育を行っています。ちょうど、12カ年一貫教育を行っている二の宮の附属幼稚園、附属小学校、附属中学校が1つの学校の中にあるような感じです。

小学部には、1組（1・2年）、2組（3・4年）、3

組（5・6年）の3学級があり、各組の定員は6名です。組での遊びを十分にした段階で「クラス開放遊び」にも取り組み、開放された組の遊びに主体的に参加する中で、人や物にかかわる力を養っています。また、「運動」や「音楽療法的活動」などは、学部全員で行っています。

中学部は、学年の枠を外した縦割り編成の3学級（1組・2組・3組で各組の定員6名）で、どの組にも1・2・3年生が在籍しています。中学部には、個人のニーズや実態に合わせた「ゆうゆうタイム」という活動があります。「環境」「衣食」「工芸」の各グループがあり、自分たちの「くらし」がより良くなるように、はじめから終わりまでの見通しが持って、成就感の味わえる活動を繰り返しています。

高等部も、学年の枠を外した縦割り編成の3学級（A組・B組・C組、各組の定員8名）で、どの組にも1・2・3年生が在籍しています。高等部には、個人のニーズに合わせた「仕事」という活動があります。「畑」「焼き物」「紙と刷り」の3班に分かれていて、適正に合わせて、活動時間にも幅を持たせています。また、個人の課題に応じて、グループ毎に活動する「オープンクラス」もあります。、「調理」「家事」「買い物」「手芸」「木工」「放送」など多様なニーズに応える活動を設定しています。

この他に、「レインボータイム」という全校縦割り班活動があります。小学部1年生から高等部3年生まで約60人が「アウトドア」「ウッド」「クッキング」「スポーツ・ゲーム」「クラフト」「ミュージック・アート」の6つの班に分かれて活動しています。活動は、1、2学期金曜日午前中に、約15回から20回（そのうち3回は終日活動）実施しています。12カ年の繰り返しの中で、周辺的に参加していた子どもも、次第に中心的な役割を担うことができるように育てていきます。

昨年度、本校は、創立40周年を迎え、今までの歩みをまとめた『四十年史』を発刊しました。また、近年本校を

卒業した4人の生徒に着目して、教師が協働で綴った『ゆっくりじっくりスローライフ教育』という本も発刊しました。これらの活動は、本校が何を大切にしてきたのかということを確認する契機になりました。

研究活動では、「自分らしく生きる学びの創造」という全体研究テーマで、2008年（平成20年）から2011年（平成23年）まで4年間取り組んできた学部研究と縦割り研究が終了しました。

今年度は、新しい全体研究テーマを決めるにあたり、1学期から「どのような研究をしていきたいのか」グループ討議したり、過去の研究紀要などの読み合わせをしたりしてきました。その過程で出された「縦割り集団」「地域」「家庭生活」というキーワードを意識して、最終的に「学校・家庭・地域のつながりの中で育つー生活教育の今日的意義を探るー」という全体研究テーマになりました。また、3つの分科会を立ち上げ、各学部の教師がどの分科会にも参加しています。各分科会のテーマは、それぞれ第1分科会が、「縦割り集団での学びを探る」、第2分科会が、「地域での育ちを探る」、第3分科会が、「家庭生活の充実につながる支援を探る」をなっています。私は、第1分科会に所属しています。いろいろな縦割り集団での活動が多い本校の「生活教育」について、新しい全体研究テーマを切り口に、第2分科会や第3分科会とも協働しながら、意欲的に取り組んでいきたいと考えています。

本校では、校舎の老朽化に伴い、校舎の増改築を話し合う「校舎改築委員会」と将来の教育活動を検討する「将来構想委員会」で、活発な議論が行われています。短期的な研究だけでなく、本校の未来を見据えた長期的な展望を考えていくことが、児童生徒の教育の向上につながると確信しています。

## 鯖江市立 立待小学校

岩堀 美雪

# 連携校だより

本校は鯖江市北西部にあり、近くには日野川が流れる全校児童593名の小学校です。児童は元気に学校生活を送っています。また、江戸時代の文豪、近松門左衛門の生誕の地が校下にあります。その影響もあって、近

松門左衛門の里として地域学習がさかんです。春の校外学習では、近松門左衛門ゆかりの地を訪問したり、地域の方から学んだりしました。

児童の課外活動の一つとして人形劇クラブもあり、約30名の児童が毎週練習に励んでいます。今年の夏休みも大阪のいぶきの小学校の人形浄瑠璃クラブの児童との交流会が開かれました。

教師集団の取り組みとしては、今年度は、「一人一人を大切に授業づくりを目指して」という研究テーマのもとに研究を進めています。組織としては、低・中・高学年部会に分かれて話し合いを行い、それを全体の場で話し合うという仕組みになっています。研究授業の持ち方として、今年度から「子どもたち一人一人を見取る」という取り組みを始めました。この方法は、教職大学院で学んだことをもとに提案させていただきました。初めはその意味がなかなか理解できないとの声もありましたが、その意義を説明するうちに、「それでは一度やってみましょう。」ということになりました。まず、





指導主事訪問で共同参観する4-3の授業と同じ指導案で、私のクラス4-2で模擬授業をしました。その時に、中学年部会のメンバーが「子どもたち一人一人を見取る」という視点で参観しました。その時付箋に書いたメ



モをもとに、その一時間に感じたことを模造紙1枚にまとめました。その模造紙をもとに、低学年部会、高学年部会の先生方にも書き方を説明して、本番の指導主事訪問日に備えました。事前に事例をもとに周知を図っていたためか、本番では混乱もなく、各部会の発表は予想以上に盛り上がりました。終わった後、「とても楽しかったです。」「子どもの様子が今まで以上によく分かり、大変有意義でした。」等の感想をいただきました。2学期の指導主事訪問でも同じ方式を取り入れる予定です。このように、教職大学院で学んだことを少しでも取り入れられたことは、大変ありがたいことでした。ご協力いただいたみそみ小学校の森北先生にも改めてお礼を申し上げます。今後も、共通理解を図りながら、教職大学院で学んだことを少しでも生かしていきたいと思えます。

## 高浜町立青郷小学校

朽木 史昌

連携校として4年目を迎えた本校は、福井県西端の高浜町と京都府舞鶴市にまたがる秀嶺「若狭富士」と称される青葉山の南麓に位置する児童数206名の中規模校です。「友だち大好き 運動大好き 勉強大好き」という学校教育目標のもと、確かな学力の育成や人権・同和教育の充実に力を入れています。

4月、スクールプランの作成に向けて、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」、「信頼される学校」のための具体的な手段や取り組みの内容について小グループに分かれて意見を出し合いました。そこでは、本校の実態からだけでなく、他校での経験等を生かした考え方など多様な意見が聞かれました。学校は定期異動による教員の入れ替えが避けられないため教員が共通の課題意識を持ち同じ方向に向かって協力していくことが必要不可欠です。今回は、年度初めに新たなスタッフで、それぞれの考えや思いを共有し合える大変有意義な時間が持てたことで、自然な形で教員間の協働の体制が生まれるのを感じました。

また、昨年度コアティチャー養成事業の指定を受け、2年目（最終年）を迎える今年度は研究主題を「伝え合う力を高める指導のあり方を求めて～確かに読み、根拠を明確にして表現する子の育成～」とし、国語のPISA型読解力の向上に取り組んでいます。身につけたい力を明らかにした単元構想（逆向き設計）を組み立て、その単元の中に適切な言語活動を設定し到達すべきモデルを児童に提示するようにした授業づくりに取り組んでいます。そして、原則として年間2回の公開授業を全員が行っています。授業研究会は小グループに分かれて行い、各研究グループには、各学年部会から1名以上が所属することで、学年ごとにつけたい力や指導事項について縦の流れを意識して授業の検討をすることにつながっています。授業では、子どもの学びの様子や変容から振り返りを行っています。

10月初めの後期指導主事訪問では、KJ法を応用し、公開授業後に研究会を行いました。参観した教員は、小グループに分かれて子どもの姿、教師の言動について付箋に書き込み模造紙に貼っていきました。その後、類似する内容についてグルーピングし課題に対する解決策について話し合いました。クラスの現状や課題を踏まえ、子どもたちにつけたい力を明らかにした意見が活発に出し合える研究会となりましたが、課題も明らか



になってきました。当日参観された教職大学院の先生方からも「今後の新しい学力を育むことができる教師づくりを目指し、前例のない取り組みを提案し合って学び合う教師集団をつくることを目指していただきたいと思えます。」という励ましの言葉をいただきました。授業研究会の在り方について今後も議論を重ねながら学び続ける教師集団をめざしていきたいと思えます。

教職大学院での学びは、校内での研修会にも生かされています。人権・同和研修会では、先進的な実践から学ぶ研修に取り組みました。「生活綴り方」の実践記録を各教員が読み解き、自分自身の取り組みや考え方について改めて見えてきたこと、そして、そこから学んだことや今後の自身の取り組みに生かせることなどをテーマに話し合いを行いました。じっくり時間をかけて読むということまではできませんでしたが、同じ実践記録を読んだ教員同士で小グループを作り、話し合いを進めました。

さらに、今年度は3学期に校内個人研究発表会を開く予定です。「教科指導」、「学級経営」、「校務分掌」などのテーマから各教員が取り組んだ実践を発表し、意見交換を行います。自身の実践について振り返り、語り合うことを通して各自の実践の捉え直しができるのではないかと期待しています。

青郷小学校では、授業実践を中核に据え様々な教育活動を通して子どもたちの伝える力を高め、つながりを深めるための取り組みを行っています。今後も、教師のつながりを深め、教師と子どもが一緒になって学び続け成長できる学校をめざしていきたいと思えます。



## 南越前町立南条小学校 赤澤 清和

先日、毎年恒例になっている学習発表会が行われた。今年度は、保護者だけではなく地域の方も招いて大々的に行われた。この発表までにはかなりの時間がかかったが、学校全体が一つのことに取り組んだ達成感に包まれ、頑張った甲斐があったと感じることができた。その発表の中で、今年は何の学年も「同じ思い」が根底にあることに気付かされた。それは、それぞれにつながりを意識し、そこからの学びを伝えてくれているということである。

1年生は、地域のボランティアの方とのつながりから、多くの人に見守られている喜び。2年生は、農業を通じて関わっていただいた地域の農業名人の方とのつながりから、先人の知恵に学ぶことの大切さ。3年生は、伝統的に地域に伝わる太鼓の指導者とのつながりから、伝統あるものを学び伝えていこうとする気持ち。4年生は、縄跳びを通じて友と息を合わせながら一つの目標に向かって成し遂げる喜び。5年生は、宿泊研修を通して深められた友とのつながりで得た、「協力」「団結」「友情」の大切さ。6年生は、合奏と合唱で友と心を一つにすることのすばらしさ。



どの学年も、「同じ思い」でつながっていることのすばらしさを感じた。その思いは、本校の研究テーマ「人との関わり合いの中で、共に学び合う子の育成」と合っている

と感じた。目指すものは、一つなんだと改めて思った。

本校の校内研究は、先に挙げた研究テーマで3年目をむかえる。児童の関わり合いを重視することは勿論、教師と児童のつながり、教師と教師のつながりを大切にしていく研究を進めてきた。



研究の始まった当初は、現職教育が行われるたびに、「児童の学びって何?」「教師の学びを見取るって何?」などの声が聞かれた。また、「授業って教師が教えるものじゃないんですか」「子ども主体の授業でいいんですか」など、学びを支える教師のあり方についても考えさせられてきた。それでも現職教育のたびに、少しずつ話し合いながら、教師同士の関わり合いを深めながら、本当に少しずつ歩みを進めてきた。

そして、つい先日後期の指導主事訪問を終えた。大学院より杉山先生に参加していただき、本校の研究の様子を見ていただいた。「いい雰囲気ですね。皆さんの意識が何かまとまった感じがします。」という言葉をいただいた。夏前では、考えられないことだと思った。この夏、この研究のもとになる本を読み、この研究の進むべき目標「共有ビジョン」について話し合うことができた。そのおかげで、教員の思いが一つ所を向き進んでいるのではないかと思う。その力が、本校の原動力になり、今抱える課題を一つ一つ克服していけるのではないかと思う。あゆみは、ゆっくりだけれども少しずつ少しずつ……。

### ■ 拠点校研究会案内 ■

11/21 wed 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校公開研究会

11/30 fri 福井大学教育地域科学部附属小学校教育研究集会

### Schedule

11/17 sat 11月合同カンファレンス

12/1 sat 11月合同カンファレンス(予備日)

12/25 tue - 12/27 thu 冬の集中講座(9:30-17:00)

#### [編集後記]

冷雨が降り続く季節を初体感しながら、噂で聞いた「福井の冬」の到来を今かいまかと心待ちにしている今日この頃です。後期最初の10月合同カンファレンスでは、ずいぶんとお互いに顔や名前を覚えた仲間がテーブルを囲んでいました。親近感を抱きながら、またこれまでの学びを共有していることもあってか、前期とは違った空気が醸し出され、議論の質もまた少し違っていったように思います。次のカンファレンスでは、他校研究集会への参加等から新たな視点を得た仲間が集います。どんな機会になるのかとても楽しみです。(山口真希)

教職大学院Newsletter No.47

2012.11.17発行

2012.11.17印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp











